

# 第 18 分科会「里山と芸術」

## ワークショップ「看板を作ろう」

日 時：2006年8月27日（日）13:00～17:00

場 所：千葉市緑区越智公民館と大藪池谷津田

参加者：20名

（大藪池谷津田近隣の住民・障害を持っている人・千葉大学生など）

### 趣 旨

今里山では産業廃棄物の不法投棄が大きな問題となっています。それを無くすために様々な自治体、国が看板を作成していますが、実際そういった看板は本当に効果があるのでしょうか？

今ある既存の看板のほとんどは「ゴミを捨てるな」といったように産廃の不法投棄者に対してストレートに訴えかけるものですが、そもそも不法投棄というのは組織的な犯行です。それを踏まえると、個人に対して働きかけるそのようなストレートな看板は意味をなさないという事は自明でしょう。

では、今後のためにはどういった看板が必要なのでしょう？

私たちは千葉大学の学生ですが、周囲を見回してみてもなかなか産業廃棄物不法投棄の現状について知っている人間は多くありません。何故ですか、と聞いてみると「生活にあまり関係がないので」という答えでした。

我々の周りでは常に様々な問題が起こり、それに対処していかなければなりません。産廃問題もその一つであると言えますが、ほとんどの人にとってそれは身近なものではないのです。

千葉に住んでいるのに現状を知らない。そのような状況で問題を解決する事が出来るのでしょうか。危機に直面している人達だけで問題に立ち向かうのには限界があります。集団の中で解決される問題の優先順位は、問題の大きさよりも、まずその問題に直面している人の多さによるからです。

そういった状況を考えるとまず必要とされているのは千葉県に住んでいる人たちの認知です。では、千葉に住んでいる人達にこの問題を日常の物として受け入れてもらうのにはどうすれば良いのでしょうか？

今、二つの疑問を投げかけましたが、それぞれの疑問がもう一方の解決方法になっていることにお気づきでしょうか。すなわち、千葉の産廃の問題を多くの人に日常的なものとして受け入れてもらうには、われわれの周りに日常的に存在する看板が最適だという事です。

当分科会ではそれを踏まえた上で、看板の一つ一つに見た人が興味をそそられる、見た人の印象に残るような工夫を凝らした看板を作成する事を目的にワークショップを行いました。

我々が提案した看板は3つ。以下にそれぞれの特徴を記します。

### 看板その1：お墓型看板

千葉県の昭和の森公園横にある建設資材置き場、そこには山と呼べるほどの盛り上がった箇所がありますが、その山は実は産業廃棄物に雑草が生えたものなのです。一見するとそれは完全に山のように見えます。

お墓型看板はそういった場所に立てられる事を目的としています。卒塔婆に似せた看板の存在が地面の下の産業廃棄物をアピールすると共に、新たな投棄をためらわせる狙いもあります。



お墓型看板

## 看板その2

### ：お手紙型看板

この看板は興味を持って看板を見てもらえるよう制作しました。見た目は手紙を大きくしたような形にしています。したがって正面からは宛名の面が見えますが、その宛名に興味を持った人が裏に回ってメッセージを読む、ということをやったものです。

宛名とメッセージは、田舎に住んでいて、産廃の現状に困っているおばあちゃんの手紙のようなものや、里山そのものからの手紙等、工夫を凝らしたメッセージになっています。

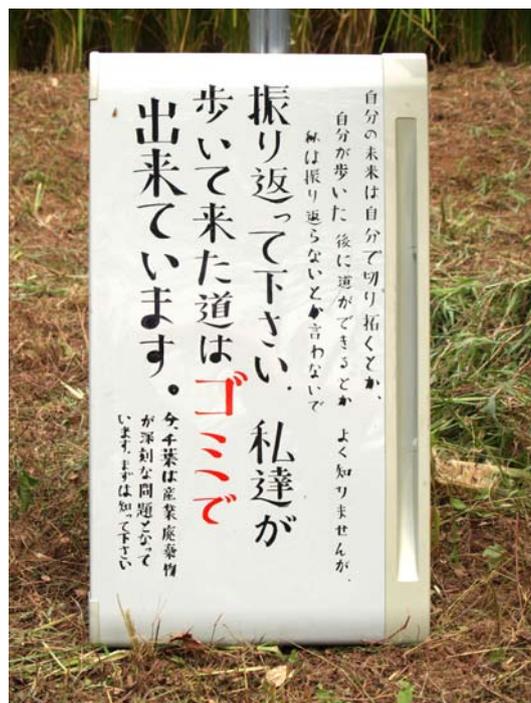


お手紙型看板



### 看板その3：ごみ看板

最後はゴミそのもので出来た看板です。この看板はゴミを看板として使用する事で、産業廃棄物の現状を知らない人に対して現場のリアルな状況を伝える事が出来ます。捨てられたゴミの構造を利用しています。例えば冷蔵庫なら、その扉を開けると中に千葉の産廃についての印刷物が入っていて、そこから情報を入手することも出来るといった具合です。当ワークショップでは、上記の3つの看板を制作すると同時に大藪池周辺地域への設置を行いました。



ゴミ看板

## まとめ

以上の看板を実際に作ってもらって、参加者の方も看板の内容を考えたり、相談をしたりしているうちに里山についてより深く考えるようになったようだ。

このワークショップのように作る作業自体を楽しんだり、一生懸命内容を考えたりして作られた看板は、看板そのものの効果という以上に、参加した人たち自身にこの問題について深く考察をするきっかけになるのではないだろうか。